第Ⅵ章　適応行動の観察記録法について

精薄児の適応に関する研究　(2)

研究第8部　牛島　義友・湯川　礼子
渡辺　靖子

第　1　部

精神薄弱児の適応に関しては評定法によって有効に判断する方法を作製[1]したが、評定法は評定者の主観が入ってくるし、またある特定の時点における行動というよりもかなり長い期間における態度や習性が判断の基礎となりやすいので先入観に影響される危険も多い。故にもっと客観的な方法として一定の時点における行動を客観的に観察分類し、これによって適応状態を診断する方法を開発していきたいと思う。

短時間見本法による行動記録法は古くから行なわれているが、その行動単位をどのようなカテゴリーに分類するかは問題である。ベールス[2]がたてたカテゴリーはこの点では非常に示唆的であるが、それは主として言語的コミュニケーション的行動が主となっており、また幼児や精薄児の行動には対人関係にまで発展していない行動も数多いのでそのまま使用することはできない。またわれわれは乳幼児の保育行動に関し保育者と被保育者との間の相互交渉行動の観察を行ない一つのカテゴリーを設定した[3]。しかしこれも両者の相互交渉に限定したので子どもの自閉的な自己活動は記録されない。一方精薄児の常同行動に関してはマッキンらの観察カテゴリーがあり、また最近自閉症児の行動記録にコフィ氏[4]らの工夫が進められている。これらを考慮しながら独自の観察法を開発していった。

精薄児の行動記録のためにまず愛育養護学校や御殿場コロニーにおいて30分あるいは1時間の連続行動記録をとり、その中の単位行動を子どもの側の積極的なactiveな行動と反対なpassiveな行動に分けたり、建設的、協調的、服従的な意味の（＋）の行動と、破壊的、拒否的、反抗的な(－)の行動に分類したりした。この仕事は主として福与氏の援助で行ないかなり積極的な結果がみられたのでこの分類をさらに短時間の行動の中から拾い出そうとした。このために15秒単位の記録をとり適応に関係した行動のカテゴリーを作成し、またその妥当性をみるために適応状態の相違すると思われる子どもたちについて比較研究することとした。

1.　観察法

観察は一人の被観察者に対して10分間観察する。この中で15秒間を一単位としてその間の行動を後に述べるカテゴリーに分類する。なお15秒内においても複雑な行動をすることもあるわけであるが、一応この15秒間の代表的な行動、あるいはそこに流れている行動や態度の流れから一つの行動単位として取り扱うこととした。即ち次の15秒間はこのようなカテゴリー分類や記録に使い、さらに次の15秒間観察し、その後の15秒間は記録に費すというように交替し10分間記録する。従って10分間記録の中に20個の行動単位が記録されるわけである。

このような観察記録を観察者は一度に一人の被観察者をみることにしている。この10分間観察記録を集積して資料を集めるわけであるが、数名の子どもを同じ日に観察する場合には最初の10分間はA児、次の10分間はB児、次はC児というふうにし、これをくり返していった。これは子どものその日における特殊な条件の影響を取り去るためである。なお整理にあたっては一人の子どもの10分記録の6回分（1時間分）をとることとした。

2.　行動のカテゴリー

行動のカテゴリーは、まず場面としてはコフィ氏の案にならい対人行動（person）の他に事物に対する行動(object)、あるいはその中間として相手と交渉しているようではあるが実は相手の持っている玩具、事物に関心が向っている場合（object-person）に分けた。その他、人にも物にも向っていないものをNone-Noneとし、この中には第1表のように、さらに5つの行動に分類した。

次にこれらの人や事物に対する態度を消極的と積極的に分け、積極的な方にはさらに言語を使わない積極的行動（A. N.）言語的な積極的な行動（A. V.）さらに言語が会話的な形をとったもの（A. C.）というふうに分ける。

さらに消極、積極的諸行動を建設的なプラスの行動と否定的なマイナスの行動にそれぞれ分類する。それぞれ

第1表　行動カテゴリー一覧表

		Object	Object-Person	Person
None-None ① 人，事物に無関心　③ 自己刺戟的行動　⑤ 自己活動 ② 常同行動　④ 独語				
Passive	+	①物を見る ②物を単にもっている ③レコード，オルガンの音等をきく	①人が物で遊ぶのを見る ②人から物を受けとる ③ピアノ，オルガンなどをひいているのをきく	①人をみる　②人の話をきく，うなずく，答える，③命令に従う ④ほめられる　⑤助けてもらう ⑥愛される
	−		①持っているのをとられる	①注意される，叱られる ②攻撃される ③拒否される
Active nonverbal	+	①物をいじる，拾う，さがす ②物を使って一人遊び	①人が持っている物にさわる ②人に物を見せる，与える ③物を媒介として友達とあそぶ	①人にさわる ②行動を模倣する ③愛情を示す，求める ④協力を示す，求める
	−	①物を叩く，こわす投げる	①人が持っている物，作った物をこわす ②人が持っているものをとる	①逃げる，人を避ける ②攻撃する ③拒否する，反対する
Active verbal	+	①物に話しかける	①物について質問，話しかけ ②物を要求する	①呼びかけ，あいさつ，話しかけ ②質問　③要求　④命令 ⑤愛情を示す，求める ⑥協力する，求める
	−	①物に話しかける	①人の持ち物，作った物をからかう	①訴える ②攻撃する，非難する ③拒否する，反対する
Active conversation	+	①物との会話	①物についての会話 ②物の役割になっての会話	①人との会話
	−	①物との会話	①物についての会話 ②物の役割になっての会話	①人との会話，口げんか

の細胞の中にさらに代表的な行動を拾い出して数字で表わすこととした。これらの具体的な行動は実際の観察記録から選ばれたものである。これらの行動を一覧すれば、上のような行動カテゴリー一覧表となる。

3.　行動分類の信頼性

ここで分類される行動は非常に多種類であるので一見困難でしかも多岐的であるような印象を与えるかもしれない。しかしこの分類にしばらくなれると、さほど困難なしに観察時間内において分類することができた。なお判別困難な行動の場合には具体的に行動を記述しておき、後で分類判別することにしていた。観察者間の一致度として自閉症と思われる一人の幼児の行動を渡辺と湯川の二人の評定者が30分間観察し、その間の一致度をとったが93.3%の一致度が得られた。

4.　被観察者

この観察法は子どもたちの適応状態を判別するのが目的であるので適応状態の相違すると思われる子どもたちについて比較する必要がある。

このために二つの集団について観察した。第一は精薄児の新入園児についての研究である。即ち愛育養護学校の新入生の入園当初（4月入学）の5、6月に8名のものについて観察し、約半年間の教育指導を受けた11月に同じ子について観察し、さらに半年後にもう1回観察した。この養護学校は幼稚部があり、従ってこの子どもたちの年令は次のようである。その知能は第2表のように軽度というよりも、むしろ重度の方に傾いている。

このような子どもに対する教育指導は学習指導というよりも身辺生活指導、集団活動への参加やきまりを、おぼえさすというようなものが主であり、一クラスの人数は約８名である。

また精薄幼児は愛育研究所で行なっている家庭指導グループからも次の13名を観察した。このグループは週１日ないし２日、10時から１時半まで治療教育を行なっており、１グループ約８名で３歳から５歳の精薄幼児がグループを作っている。このグループは精薄の程度や年令によってグループ分けされている。

対象人数は養護学校、家庭指導グループを合わせて21名で３回目は12名である。観察は自由遊びの時間が望ましいので大体昼食後の12時半頃から１時間位である。従ってこのグループの記録をとるのに約30回を要した。なおこの養護学校および家庭指導グループの子どもの観察は湯川礼子が分担した。

第二のグループは自閉症児の治療集団(A)である。これは愛育研究所において週１回１年間継続の治療を行なっている。この中から次の８名について治療時間（約50分）内に観察した。この治療集団は子ども１人に治療者１人という形で集団的に治療しており、１回のグループは約６名である。自閉症児のことであるから最初の頃は極端に自閉的、拒否的であり、治療の回を重ねるに従って行動に少しずつ変化があらわれている。それは当然適応状態が好転しつつあると考えられるので、この治療過程を継続的に観察することとした。この治療は昭和43年の５月に始まったが、観察は43年６月から12月まで行ない１月毎の結果をまとめていった。なお30分間の観察をもって１月分の資料とした。なお、この他自閉症児については少数の精薄幼児群の中に１人だけまじえて治療教育をしているグループ(B)もあり、このものの中からも数名のものをえらんで月々の継続観察を行なった。なおこの自閉症児群については渡辺靖子が分担した。

第２表　対象　精薄幼児

	氏　名	性別	年　齢	発達指数
養護学校	○K.A.	♂	6；3	24
	H.I.	♂	6；6	48
	○Y.U.	♀	6；2	51
	N.K.	♂	5；1	68
	○M.K.	♂	4；7	26
	○R.S.	♀	5；0	53
	○S.S.	♂	4；0	44
	Y.M.	♂	5；1	56
家庭指導グループ	M.I.	♀	4；1	58
	○N.K.	♂	3；4	79
	○A.S.	♀	3；10	60
	M.N.	♂	5；9	42
	M.N.	♀	3；8	57
	○A.H.	♂	3；8	31
	○I.M.	♀	3；1	53
	K.M.	♂	4；1	45
	M.K.	♂	4；6	33
	Y.S.	♂	3；1	テスト不能
	○N.S.	♂	3；10	48
	○K.T.	♂	4；10	テスト不能
	○T.B.	♂	4；9	51

○印は３回継続して観察したもの

第３表　対象　自閉症児

	氏　名	性別	年　齢
A群	W	♂	3；9
	N	♂	6；2
	Ys	♂	8；11
	S	♀	6；6
	Yk	♀	7；2
	E	♀	7；3
	M	♂	5；3
	H	♂	7；2
B群	H	♂	4；6
	A	♂	5；2
	M	♂	4；7
	K	♂	5；0
	T	♂	4；11

結　果

1）精薄児グループ

これは第１回、第２回観察は21名であるが、３回目は12名であるのでこれを21名分に換算した数字を出すことにした。

まず一々の行動群の結果を示すと次の表のようになる。例えば None-None のように孤立的自閉的行動では自己刺激的な行動と自己活動は少しく増加している。これは必ずしも活動的になったというのではなく、前者はフラストレーションの反映ともみられるような行動である。

Object の行動は Passive の中では単に物を見る動作は減り、物をもつという行動は増加している。積極的ではあるが非言語的なものでは、物を叩いたり投げるというような破壊的な行動は減少している。Active Verbal の行動はほとんどみられなかった。

第4表　カテゴリー別行動出現頻数

行動カテゴリー			1回目	2回目	3回目
None-None	1.	人，事物に無関心	78.0	84.8	84.9
	2.	常同行動	3.0	0	0
	3.	自己刺戟的行動	12.0	0	56.6
	4.	独　語	7.0	11.5	6.3
	5.	自己活動	122.5	156.4	154.0
Object					
Passive	1.	物を見る	31.0	13.7	15.7
	2.	物を単に持つ	9.0	3.7	29.9
	3.	レコードをきく	2.0	1.0	0
Active-Nonverbal					
	1.	物をいじる，拾う	356.0	414.0	357.0
	2.	物を使って一人あそび	512.7	585.2	467.0
	(1)	物を叩く，投げる	106.0	79.1	36.2
Active-Verbal	1.	物に話しかける	0	0	0
	(1)	物に話しかける	0	0	0
Active-Conversation	1.	物との会話	0	0	0
	(1)	物との会話	0	0	0
Object-Person					
Passive	1.	人が物で遊ぶのをみる	147.4	70.2	114.7
	2.	人から物を受取る	8.4	20.8	23.6
	3.	ピアノをきく	2.5	0	0
	(1)	持っているものをとられる	3.5	7.2	14.1
Active-Nonverbal	1.	人が持っている物にさわる	14.5	43.7	26.7
	2.	人に物を見せる，与える	42.7	97.1	42.4
	3.	物を媒介に友達あそび	51.9	30.0	29.8
	(1)	人が持っている物をこわす	5.0	5.0	6.7
	(2)	人が持っている物をとる	14.5	18.4	9.4
Active-Verbal	1.	物についての質問，話しかけ	24.5	15.5	14.2
	2.	物を要求する	3.0	4.2	0
	(1)	人の持ち物をからかう	0	0	0
Active-Conversation	1.	物についての会話	0	0	0
	2.	物の役割になっての会話	0	0	0
	(1)	物についての会話	0	0	0
	(2)	物の役割になっての会話	0	0	0
Person					
Passive	1.	人をみる	124.0	86.7	69.2
	2.	人の話をきく，うなずく	110.8	84.8	29.8
	3.	命令に従う	93.9	73.6	53.4
	4.	ほめられる	4.5	3.0	0
	5.	助けてもらう	50.5	16.4	25.4
	6.	愛される	157.0	140.8	197.8
	(1)	注意される，叱られる	9.0	18.0	11.1

	(2) 攻撃される	20.0	20.2	21.6
	(3) 拒否される	1.0	2.0	0
Active-Nonverbal	1. 人にさわる	31.5	21.0	26.7
	2. 行動を模倣する	32.0	37.4	45.6
	3. 愛情を示す，求める	55.0	122.9	89.6
	4. 協力を示す，求める	43.5	63.0	55.0
	(1) 逃げる，人を避ける	10.0	13.5	33.0
	(2) 攻撃する	45.5	33.0	62.8
	(3) 拒否する，反対する	8.5	11.7	7.9
Active-Verbal	1. 呼びかけ，話しかけ	117.7	53.0	33.0
	2. 質問	3.0	6.0	6.3
	3. 要求	27.5	17.0	1.6
	4. 命令	0	3.0	1.6
	5. 愛情を示す，求める	4.0	2.0	1.6
	6. 協力を示す，求める	10.0	8.2	3.1
	(1) 訴える	1.5	1.0	0
	(2) 攻撃する，非難する	1.0	10.0	0
	(3) 拒否する，反対する	2.0	7.2	0
Active-Conversation	1. 人との会話	0	0	0
	(1) 人との会話，口げんか	0	0	0

次に対人というよりも人のもっている物に興味のある Object-Person 行動は人から物を受け取ったり、持っている物を取られるという、いくらか対人関係のある行動は増加している。Active Nonverbal では物を媒介として友だちとあそぶという行動は減少しているが他の行動には一定の傾向を見出しにくい。Active Verbal の中では(1)の質問や話しかけは減少している。

Person に関係の行動では Passive の中では、人を見る、話をきく、助けてもらうの行動は減少している。しかし愛される行動には増加が認められる。即ち消極的な対人行動が減り、いくらか積極的な物へ転じている傾向がうかがわれる。

Active Nonverbal では行動を模倣する、愛情を示す、求めるという行動は増加し、また人を避ける、攻撃するというような行動にも増加傾向が感じられる。Active Verbal は呼びかけたり話しかけるような積極的行動が増加するわけではなく、かなり減少している。要求や協力なども減少している。故に単純に行動が積極的、言語的になったとみるのは困難である。

次に行動群を None-None と Passive, Active の三つに分けて集計すると第5表のようになる。None-None の行動が総体的に減少するというわけではなくかえって増加し、Passive の行動はいくらか減ってはいるが反対に Active の行動が増加するというようにはなっていない。第1回目に対し第2回目に増加したようにみえたが半年後にはまた元に戻っている。

第5表　積極的・消極的　行動群

	None-None		Passive		Active	
	実数	%	実数	%	実数	%
第1回N＝21	222.5	8.8	771.5	30.6	1526.0	60.6
第2回N＝21	252.7	10.0	564.1	22.4	1703.1	67.6
第3回N＝12	192.0	13.3	387.0	26.9	861.0	59.8

第6表　事物・人と事物・人　行動群

	Object		Object-Person		Person	
	実数	%	実数	%	実数	%
第1回N＝21	1017.7	40.4	318.4	12.7	961.4	38.1
第2回N＝21	1099.7	43.6	312.7	12.4	855.4	33.9
第3回N＝12	577.0	40.1	176.0	12.2	495.0	34.4

次にNone-Nonn 以外の行動を Object, Object-Person Person の三つにまとめてみると第6表のようになる。ここでも Object の行動が減るというわけではないし Person の行動が増加するというふうにもなっていない。

Object-Person の行動はほとんど同じ率であらわれている。故に彼らの行動がだんだん物から人物の方に向い対人適応関係が進んでくるというふうにはいいにくい。

次にさらに積極的な建設的なプラス(+)の行動と消極的、破壊的なマイナス(−)の行動に分けてみると全体としてはマイナスの行動ははるかに少ないが変化の傾向としては特に明らかなものは見出しにくい。(第7表)

第7表　プラス・マイナス　行動群

	(+)の行動		(−)の行動	
	実　数	%	実　数	%
第1回　N=21	2070.0	82.2	227.5	9.0
第2回　N=21	2040.9	81.0	226.3	9.0
第3回　N=12	1121.0	77.9	127.0	8.8

第8表　配点表

点数	行　動　群
0	None-None
1	Object Passive, Object-Person Passive, Person Passive,
2	Object Active Nonverbal, Object Active Verbal, Object Active Conversation,
3	Object-Person Active Nonverbal, Person Active Nonverbal,
4	Object-Person Active Verbal, Object-Person Active Conversation, Person Active Verbal, Person Active Conversation

次にこのような行動を一つの点数に換算してみると、即ち None-None の行動は0点とし、Passive な行動は1点、Object に対する積極的な行動 (A.N. A.V. A.C.) は2点、Object-Person ならびに Person 群の中で A.N. には3点、A.V. と A.C. には4点を与えるというふうに点数化してみる(第8表)。なおこれはコフィ氏の採点をまねしたものである。その結果平均点は第9表のようになり、この採点法でも適応点にはほとんど進歩がみられていない。なお個々人についての変化をみると養護学校の K.A. Y.U. M.K. S.S. Y.M. には進歩がみられるが他の被観察者には特に変化がみられなかった。

この行動記録にもとづいて精薄児の1年間の行動の変化をたどってみると、個々の行動については若干適応性を反映しているものがみられたけれども行動群をまとめて考察したり、あるいは全体を一つの適応点で表わす場合にはそのような進歩のあとを見出すことができなかった。

第9表　適応点 M.SD (精薄児)

	氏　名	1回目	2回目	3回目
養護学校	K. A.	1.01	1.70	1.51
	H. I.	2.17	1.84	—
	Y. U.	2.06	1.92	2.32
	N. K.	2.28	2.28	—
	M. K.	1.08	1.54	1.37
	R. S.	2.37	2.03	2.22
	S. S.	1.44	1.73	2.01
	Y. M.	1.95	2.19	—
家庭指導グループ	M. I.	2.33	2.17	—
	N. K.	2.08	2.30	2.07
	A. S.	1.90	2.02	1.51
	M. N.	1.92	1.80	—
	M. N.	1.99	1.68	—
	A. H.	1.80	1.86	1.86
	I. M.	1.58	1.95	1.38
	K. M.	2.47	2.21	—
	M. K.	1.18	1.52	—
	Y. S.	1.63	1.55	—
	N. S.	2.01	2.19	1.33
	K. T.	1.53	1.28	1.44
	T. B.	1.32	1.58	1.47
計	M	1.81	1.87	1.71
	SD	0.43	0.28	0.34

2)　自閉症児グループ

コフィ氏の研究は自閉症児を対象として考えられたものであり、またその採点にあたっても自閉的傾向が減ずるに従って点数が増加するように配慮されていた。渡辺は自閉症児の治療群について同一方法で行動記録を行なった。これは前に述べたように6月から12月までの毎月の記録である。

この場合、前と同じように各行動群の整理も行なったが全体を点数化した結果だけを示す。その結果A群の8名、B群の5名の各月の点数は第10表のようになる。B群のH, Aには点数の上昇が見られるが、他の者についてはこの期間中に上昇、下降などが入り混っていて一定の傾向を見出すことは困難であった。なおコフィ氏の自閉症児についての結果においても、ほとんど同様な結果でこの行動点においての明瞭な上昇傾向は見出されなかった。

以上の結果は研究開始にあたっての予測と反するもの

第10表　適応点 M. SD（自閉症児）

	氏名	6月	7月	9月	10月	11月	12月
A群	W	1.9	1.5	2.1	1.7	2.0	1.9
	N	2.0	1.5	1.3	0.8	1.2	1.2
	Ys	2.4	2.0	1.9	—	—	—
	S	1.8	0.9	1.5	—	0.9	—
	Yk	2.5	2.6	2.9	2.2	2.2	2.0
	E	1.7	1.3	1.9	1.4	1.4	1.7
	M	1.9	2.9	2.6	2.5	1.8	2.0
	H	1.2	1.4	1.5	1.0	—	—
B群	H	1.0	1.1	1.7	1.9	1.6	—
	A	1.9	2.0	2.3	—	—	—
	M	1.9	0.9	—	—	—	—
	K	1.8	1.0	1.8	1.6	1.7	1.4
	T	0.9	1.5	—	—	—	—
計	M	1.76	1.58	1.95	1.64	1.60	1.70
	SD	0.45	0.62	0.45	0.51	0.42	0.31

で彼らの適応行動を客観的には握するのが、いかに困難であるかを教えている。無論この場合に観察法そのものというよりも被観察者の行動自体にも複雑な時間的経過があるのかもしれない。たとえば心理療法の集団の場合には始めには静止的であるのが破壊的、攻撃的に移り、その後に積極的、建設的にかわる。従って短い時間だけで行動を見ていると表面的には、かえって破壊的行動が多くなったりする。同じような意味で精薄児の教育も数年間の長い経過をみれば積極的、適応的行動に進むが1年間位の行動では子供が動くようになったために、かえって破壊的、拒否的な形をとるかもしれない。また自閉症児の治療は一層複雑で絶えず望ましい行動へと一歩ずつ前進していくものとは違うのかもしれない。このように被観察者の行動自体に問題があるとも考えられる。

しかしとに角微視的な方法での行動記録はこの間の適応行動をは握し評価するのに適当な方法であるということは残念ながらできなかった。これはわれわれの結果のみでなくコフィ氏の結果にもみられたことであるので今後なお方法的な検討を加えなければならない。われわれの結果は残念ながら消極的であったが、同じ試みをする人にとっては参考となるものであるのであえてそのままの数字を発表することとした。

第 2 部

適応性を評価するに当り客観的行動記録は成功しなかったので、次に行動に関する評価的な五段階尺度による評定法を考えた。これは子どもの行なう行動を建設的であるとか合目的的、友好的などを評価する方法である。従ってこれには多分に観察者の評価態度、主観が入りこむもので、それだけに客観性は乏しいが評価は比較的容易であり、この方法で適応程度をみることができないかと考えて試行してみた。

方法は次の記録用紙で11の項目である。始めの二つは行動のまとまり方をみたものであり、「建設的」「合目的的」は行動に一定の建設的な目標がみられる。「自発的」、「自由解放的」、「積極的」は被観察者の内在的な態度、「友好的」と「友人関係」は対人的態度、「表情」、「不安」は被観察者の情緒面の観察である。これを記述尺度で五段階に評定するが、採点は積極的な望ましいものの方を5点、その反対を1点とするようにして採点した。即ち評定の中に○印をつけた方が5点、その反対の側が1点となる。この観察の条件は養護学校の精薄幼児について行なった。対象は10人であるがその知能は40、50台のものである。換言すれば精神年令では3歳前後の子どもたちである。第1回観察は昭和44年5月、第2回は半年後、第3回はさらに半年後である。観察方法は1人の子どもを10分間観察し、その間の行動をこの評定尺度で評定する。この評定を3回行なって、その平均をもってその回の行動点とした。

第11表　対　　象

氏　　名	性	年　　齢	発達指数
S.A.	♂	5；6	42
Y.O.	♀	5；1	46
M.O.	♂	4；9	52
N.K.	♂	6；0	49
H.K.	♀	7；5	44
T.H.	♂	4；10	49
Y.H.	♂	5；6	59
K.M.	♀	5；9	59
T.M.	♂	4；4	45
Y.Y.	♀	5；3	44

1.　評定の信頼度

この項目を2人の評定者が同時に行なった一致度をみる。即ち6人の被観察者の資料によって評定が完全に一致したもの（5段階のうちの段階点の一致）が65%、不一致なものが35%あった。なおこの不一致は観察者の一般評価水準の相違と個々の行動の見方の相違の両方から

記　録　用　紙　（様　式）

No.＿＿＿＿所属＿＿＿＿氏名＿＿＿＿男・女

記録月日　昭和＿＿年＿＿月＿＿日　記録者＿＿

生年月日　昭和＿＿年＿＿月＿＿日

年　齢　＿＿歳＿＿月

1. 主な行動○
- 大体一貫している
- まとまった行動が二つ以上
- まとまった行動とばらばらの行動
- ばらばらの行動ばかり

2. 形　式○
- 一つの目標に統合された各種の行動から成る
- 一つのあそびだが同じ行動のくり返し
- 一つのあそびだが無関係な行動が多い
- あそびともいいにくいが他人の行動をみていることが多い
- その他

3. 建設的○　破壊的
- 熱心に作っている
-
- 作ったり、こわしたり
-
- 他人の邪魔、破壊

4. 合目的的○　衝動的
- 計画的
-
- はっきりした目的がみにくい
- ちょこちょこ手を出す
- 衝動的

5. 自発的○　他動的
- 自発的指導的
- 自分でやりたがる
- 模倣的
- 他に刺激されて動く
- 他に刺激されても動かぬ

6. 自由解放的○　抑圧的
- 自由に振まうが他人に迷惑なことはしない
- のびのび振舞うが自己中心的
- 遠慮がち
- おずおずしている
- 拒否的

7. 積極的○　消極的
- 積極的・建設的
- 積極的・攻撃的
- 時々する
- おとなしい
- 何もしようとしない

8. 友好的○　攻撃的
- 仲良くしたり助けたりする
- おとなしい
- すぐあきらめる
- 他人のせいにする
- 悪意・敵意

9. 友人関係○
- 協力的
- 競争
- 仲間へ参加
- 平行的
- 孤立

10. 表情○
- 生気に溢れている
- ににこしている
- 表情が少ない
- 無表情
- 緊張している

11. 不安○
- 満足している
- 気嫌がよい
- 無関心
- 不満・いらいら
- 恐怖的

第12表　評価点 M S D

		第1回	第2回	第3回
○主な行動	M SD	2.9 1.08	2.8 0.98	3.3 1.09
形式	M SD	2.9 0.88	2.4 0.92	2.4 0.82
建設的	M SD	3.9 0.64	4.0 0.69	3.9 0.56
合目的的	M SD	3.8 0.71	4.0 0.65	3.8 0.76
○自発的	M SD	3.9 0.80	4.2 0.59	4.0 0.50
○自由解放	M SD	3.9 0.71	4.3 0.54	4.3 0.52
○積極的	M SD	3.8 0.97	4.1 0.66	4.1 0.49
友好的	M SD	3.9 0.99	4.3 0.84	3.8 0.70
○友人関係	M SD	2.2 0.64	2.5 0.68	2.4 0.50
○表情	M SD	3.6 0.83	4.1 0.61	4.1 0.56
○不安	M SD	3.7 0.90	4.1 0.66	4.2 0.83
○印7項目合計	M SD	20.6 3.32	21.8 3.06	22.0 3.46

起ると考えられるが、必ずしも一致度は高くなく主観性が強いといわねばならない。なお2段階以上も評価がずれたものは3項目分（5％）であって大部分は1段階のずれである。

2.　評価の変化

次に半年おきになされた3回の評価結果をみると第12表のようで、これは11項目別に10人の平均段階点を示した。

主な行動は回が進むに従い断片的な行動から比較的持続する行動にはなっている。しかし行動の形式、即ち全体が一つの目標に統合されたものに進む有機的な行動群というようなまとまりへの発展はみられない。建設的と合目的性はこの段階の子どもについては発達が見出し難かった。しかし自発的、自由解放的、積極的というような観点からはこの1年間に発達が見出される。即ち消極的、抑圧的、他動的であった行動が徐々に積極的に伸び伸びと自由に振まい自発的に行動するような傾向がうかがわれる。

次に友好的は、攻撃性がかえってあらわれたりするために単純な進歩の姿をとってはいない。友人関係は最初の時からみると2回後はかなり高まってはいるが全体の数字は平行的なものから仲間へ参加するという段階である。これは普通の子どもにおける3歳児にみられる行動に似ている。

表情は不適応であるほど緊張しているわけであるが、2回目以後はかなり緊張が解けたにこにこした姿となっている。不安についても同様の傾向がみられ2回以後は点数がよくなっている。

以上の結果を概括すると行動自身の合目的性とか、まとまりのある行動といったような点ではまだ進歩はみられなかったが、子どもの内面的な緊張の解消とか情緒面においてはかなりの発達がこの評定尺度から読みとられる。このことは被観察者の年令が小さくその精神年令が3歳程度であるために起ったことかもしれない。しかし逆にいえば精薄幼児に関してはこの内面的、主観的方面の発達をとらえることによって適応程度の判定ををすることが可能と考えられる。故に今後はこの積極的な結果の出た7つの項目（主な行動、自発的、自由解放、積極的、友人関係、表情、不安）から観察評価していくことがよいと考えられる。いまこの7つの項目の合計点を示すと第12表の中の最後の欄になる。

3.　まとめ

われわれは精薄教育や問題児の治療教育において適応状態がよくなってくる姿を客観的には握しようとしてまず15秒単位の行動を微視的に観察記録する方法を試みてみた。即ち21名の精薄幼児の幼児教育、13名の自閉症児の治療教育を半年間隔で3回の時点で観察した。しかしその結果はこのような客観的な微視的行動記録法では単純な適応性向上の評価は困難であった。

次に通常の評定法によって主観的な評価をまじえたものを試みた。被評定児の自発性とか情緒面のような主観的な面において行動の上昇を見出すことができた。従ってこれらの項目からなる評定尺度をこしらえた。

〔注〕

1)　牛島義友、精神薄弱児の適応に関する研究(1)日本総合愛育研究所紀要Ⅳ　1968
2)　Bales R. F. Interaction process analysis 1950
3)　牛島義友、湯川礼子、保育者と乳幼児の相互作用の継続的研究　教育社会心理研究　第5巻　1966
4)　H. S. Coffey & L. Wiener ; Group treatment of autistic children 1967

Chapter Ⅵ On the Method of Observing and Recording the Adjustment Behaviors

Dept. 8 Yoshitomo Ushijima
Reiko Yukawa
Yasuko Watanabe

With a view to grasping objectively the state of adjustment of mentally retarded or problem children in the process of their education or therapeutic education, we tried at first the method of observing and recording the behaviors of these children by the unit of 15 seconds.

Twenty-one mentally retarded young children and 13 autistic children were observed 3 times in the process of their education at intervals of half a year. In the result we found it was difficult to rate the adjustment improvement by such an objective and microscopic method.

Then, we tried an ordinary rating scale method including subjective assessment. By this method, the children's adjustment improvement was found in such subjective phases as 'spontaneity,' 'friendship,' 'emotions', etc..

Therefore, we devised a rating scale consisting of 7 items that contain these phases.